

## 主 題：深遠なる神の憐れみ 2

聖書箇所：ヨナ書 1章17節～2章10節

先週からの続きです。

ヨナが神に逆らったことで船は嵐に襲われました。これは自分が神のみこころに逆らっているからだとしてヨナはわかっていたのです。「私を捕えて、海に投げ込みなさい。」と、ヨナが海に投げ込まれたとき嵐は止まりました。この出来事によって、船乗りたちは主を恐れ、イスラエルの神をほめたたえたと誓願します。ヨナは主が備えられた魚の腹の中で三日三晩過ごします。1:17「主は大きな魚を備えて、ヨナをのみこませた。ヨナは三日三晩、魚の腹の中にいた。」ヨナはこの間に大切なことを学ぶのです。彼が学ぶべきことを神は彼に教えられたのです。それはまた、私たちにも共通した学びです。

ヨナが学んだことは、彼が神に用いられてゆくために必要だったことでもあるのです。2:1に「ヨナは魚の腹の中から、彼の神、主に祈って、」とありますが、大変な状況に置かれた中でヨナは神に祈りました。それは彼が、神がどのようなお方かを知っていた信仰者だったからです。彼が彼の神に祈った三つのことを見て行きましょう。

## I. 感謝の祈り 2-6 節

神がどんなにすばらしいお方かを学んだから、ヨナは感謝の祈りを捧げました。

## (1) 神は憐れみに溢れたお方

1 節「彼の神、主に祈って」、6 節「私の神、主よ」と呼びかけます。神との関係は何も変わらない、永遠のものです。ヨナは死を目前にして、神の前に罪を犯したけれど神は赦してくださるのだと言います。救われた者がその救いを失うことはありません。神は何度でも赦してくださるのです。罪を言い表わすことによって、神との関係が回復されるのです。これこそ神の憐れみです。

## (2) 神は私を助けてくださるお方

2 節「私が苦しみの中から主にお願いすると、主は答えてくださいました。」、6 節「あなたは私のいのちを穴から引き上げてくださいました。」と、神は私を見捨てず助けてくださると言います。ヨナには非常な苦しみがありました。「よみの腹の中」で海に沈んで行くのです。「潮の流れが私を囲み、」「あなたの波と大波がみな、私の上を越えて行き」「水は、私ののどを絞めつけ」「海草は私の頭からみつき」「私は山々の根元まで下り」と表現しています。5 節の「のど」と7 節の「たましい」はいずれも「いのち、いのちをもった生き物、息、呼吸」ということです。「絞めつけ」とは死に直面していることを表現しています。詩篇 116:3 にはこのように書かれています。「死の綱が私を取り巻き、よみの恐怖が私を襲い、私は苦しみと悲しみの中にあつた。」と。「よみ」「穴」は滅びです。墓は死を表わします。

1:17 に大きな魚を「備えて」とありますが、この「備えて」ということばはヨナ書に4箇所出てきますが、神の憐れみによってヨナは助け出されたのです。

## (3) 神はすべてを支配される主権者です

神はすべてを導き支配されます。すべてのことは神のみわざです。魚を備えられたのは神です。ヨナが海に投げ込まれたことは神の計画でした。3 節「あなたは私を海の真中の深みに投げ込まれました。」と、船乗りたちに投げ込まれたことは神のわざだと言います。そして、「あなたの波と大波がみな、」と「あなたの」とあるのは、これが神のなさるわざだからです。「私のいのちを穴から引き上げて」、そして、10 節「主は、魚に命じ、ヨナを陸地に吐き出させた」のですと、死に直面した状態から救い出されたのは、神、神はすべての主権者だと言うのです。すべてのことの背後には神の御手があるのです。それに信頼するとき、そこに期待が生まれます。これが信仰者です。ヨナはそこに目を留めることができたから、感謝したのです。そして、ヨナの信仰を神は用いられるのです。

## (4) 神は愛のお方です

嵐は自分のせいだとヨナは告白します。神の懲らしめは私自身のため、私を愛されるがゆえだとヨナは気付きます。そのとおり、神は罪を犯している者には懲らしめを与え、神に従っている者には試練を与えられます。神は最善を成してくださいます。それは、その人を変えるためです。しかし、私たちは「試練によって」と言いますが、よく考えてみるべきです。自分の罪のせいではないかと。もしそうなら、悔い改めることが大切です。

## (5) 神は喜びと満足の源です

4節「私はあなたの目の前から追われました。」とありますが、それはヨナの望んだことでした。ヨナは神から逃れようとしたのです。エルサレムからできるだけ遠くへと。ヨナには自分の行動を正当化する理由があったのです。なぜ、自分たちの国を苦しめるあのアッシリヤに憐れみをかけるのか？と。彼は神のみこころを知っていながら、自分の思いを優先したのです。しかし、そこには何の喜びも満足もありませんでした。ヨナは気付きます。神のみこころに逆らっては何の得もない、本当の喜びも満足もないことを。間違っただけに神の祝福はないことを、私たちも知るべきです。

(6)神は信頼に価するお方です

4節b「もう一度、私はあなたの聖なる宮を仰ぎ見たいのです。」、再び見ることができましょう、とこれは単なる希望でなく、ヨナ自身の確信、期待を述べているのです。

⇒これらのことの故に、ヨナは感謝の祈りを捧げました。

## II. 悔い改めの祈り 7, 8節

ヨナは自分の罪深さに気付きました。それを学びました。ヨナは死に直面した時、自分の歩みを振り返ったのです。自分を吟味し自分のあやまちを正しく見えています。自分の選択が間違っていると分かったのです。「主を思い出した」のです。詩篇42:6「私の神よ。私のたましいは御前に絶望しています。それゆえ、ヨルダンとヘルモンの地から、またミツアルの山から私はあなたを思い起こします。」と、主を見上げること、そこに答えがあるのです。

そして、8節「むなしい偶像に心を留める者は、自分への恵みを捨てます。」とあります。まことの神に信頼しないことです。偽りの神がもたらすものはむなしいものです。この「むなしい」とは「空虚、無価値」ということですから、むなしいものに頼ってもむなしいだけです。

続いて、「自分への恵みを捨てます」とあります。（「神の恵み」ということばは旧約聖書に250回以上出てきます。）これは、自分への神の恵みを失う、喪失する、犠牲にするということを意味しています。神の祝福は私のものになるのに、私の間違っただけにそれによってそれを逃している、神が与えようとされる祝福を失っているということです。

ヨナにとって偶像とは「自分の考え」だったのです。ヨナがしたことは、7節の後半に「私の祈りはあなたに、あなたの聖なる宮に届きました。」とある通り、ヨナは祈りをなし、神は答えられました。実はヨナはそれまで祈っていなかったのです。祈りは信仰生活に関連深いのです。正しい信仰の歩みには祈りが伴います。

⇒神がヨナを用いられたのは理由があったのです。ヨナはすばらしい信仰者でした。自分の失敗、過ちに気付いたとき、悔い改めて神に立ち返り、正しいことを行って行きました。自分の罪を反省し神を誉めた称えるのです。これは私たちにも神が望んでおられることです。

## III. 再献身 9節

「救いは主のもので。」とヨナは言います。「私の誓い」とは主に従うという選択です。主のみこころに従うことが最善だと信頼するのです。風、波、魚など、自然界は神に忠実です。不忠実なのは人間なのです。私たちは自らの意志で神に従ってゆくのです。ニネベの人に福音を伝えることは神のみこころでした。マタイの福音書でイエスはこのヨナのことを引用されています。12:39~ですが、イエスさまはご自分とヨナと比較されました。三日三晩を関連づけておられますが、41節には「ニネベの人々はヨナの説教で悔い改めた」、ところが、あなたがた(律法学者やパリサイ人)はどうでしょう？と言われました。ヨナはイエスの予型であるといわれますが、ヨナより勝ったもの、ご自身が救い主なのです。イエスのメッセージが真実である証拠に、イエスは三日目によみがえられました。そして、これこそがイエスが神であることを証明するのです。しかし、人々は頑なでした。「救いは主のもの」、罪から救ってくださる神、その神が私たちを罪の力から解放して下さったのです。

ヨナは神がどんなにすばらしいお方かを覚え、悔い改めて行きます。これがヨナの再献身です。このヨナを神は用いられるのです。

⇒私たちも自らを正しく吟味し、正しく歩もうと決心すること、それを神は望まれるのです。